第18回

発掘展

～夏休み！子どものための考古学～

久留倍官衙遺跡　八脚門（政庁東門）復元イメージ

西暦672年、古代史上の大乱である壬申の乱が起こり、のちに天武天皇となる大海人皇子と大友皇子が争いました。吉野で仏教修行をしていた大海人皇子を大友皇子側が滅ぼそうとしているとの報に、皇子は吉野を逃れ、伊賀を越え、まさに朝明郡に至ったところで、雲間から出てきた太陽をお祈りをしたという記録があります。

久留倍官衙遺跡の門や建物が東向きに建てられているのは、このことにちなんで、太陽が出る方向を意識して建てられたとも考えられています。

また、740年に聖武天皇が来られたゆかりの地とするむきもあります。

弥生時代の久留倍遺跡

（約 2,000 年前）

市内大矢知町で見つかった遺跡で、弥生時代（約 2,000 年前）にあったムラの一つが確認されています。

久留倍遺跡では、当時の人びとが生活に使っていた道具類が数多く見つかっています。なかでも、銅鐸の舌が見つかったことはとても重要です。銅鐸は、弥生時代の農耕にまつわる儀式に使われた青銅器と言われています。

これが舌　　四日市市立博物館蔵

銅鐸の舌とは？

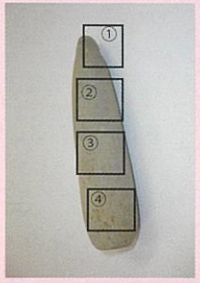
音を鳴らすために、銅鐸の内部に振り子のように取り付けられた部品です。

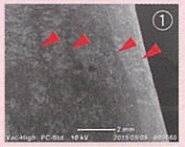
弥生時代の久留倍遺跡の様子

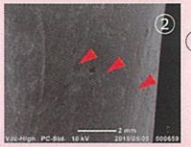
久留倍遺跡の銅鐸の舌

長さ 8.8cm、最大径 2.1cm、重さ 52.2ｇで砂質砂岩という石が加工されています。

上部がえぐり込まれており、その部分に紐をくくりつけて、銅鐸の内部に取り付けていたと考えられます。右の丸数字の写真は、電子顕微鏡で詳しく調べた様子です。

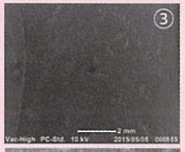


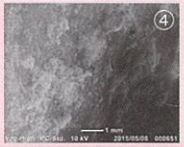




① 加工した時に石をえぐった加工痕が筋状に残るが、角がとれて磨滅しています。これは紐をくくりつけて使っていたためです。

② ④と比較すると、石の表面の凹凸がなくなっていますが、筋状にと石で磨いた痕跡が残っています。





③ ④②と比較すると、石の表面の凹凸や筋状の加工痕もなくなっています。銅鐸を鳴らすために、銅鐸にあたってすり減ったと判断できます。

④ 石の表面の凹凸が観察できます。

調査・撮影協力　三重県総合博物館

奈良・平安時代の久留倍官衙遺跡

（約 1,300 ～ 800 年前）

久留倍遺跡のなかでも、特に奈良・平安時代（約 1,300 ～ 800 年前）の役所あとは重要な遺跡であることから国の史跡に指定されました。

国の史跡に指定された部分を久留倍官衙遺跡と呼んでいます。

現在、史跡公園として工事を行っています。

完成後の公園のイメージ

建ちならぶ正倉群と区画溝の様子（右端の溝が区画溝の一辺）

円面硯

奈良時代の円形の硯です。1点のかけら（右下）しか見つかっていませんが貴重品です。（左上はレプリカ）

転用硯

容器のふたとして作られた土器ですが、硯は貴重品でしたので、下級役人たちは、代わりに容器のふたをひっくりかえして使っていました。

墨が付いているので、土器が黒ずんでいます。

当時の役所での仕事イメージ

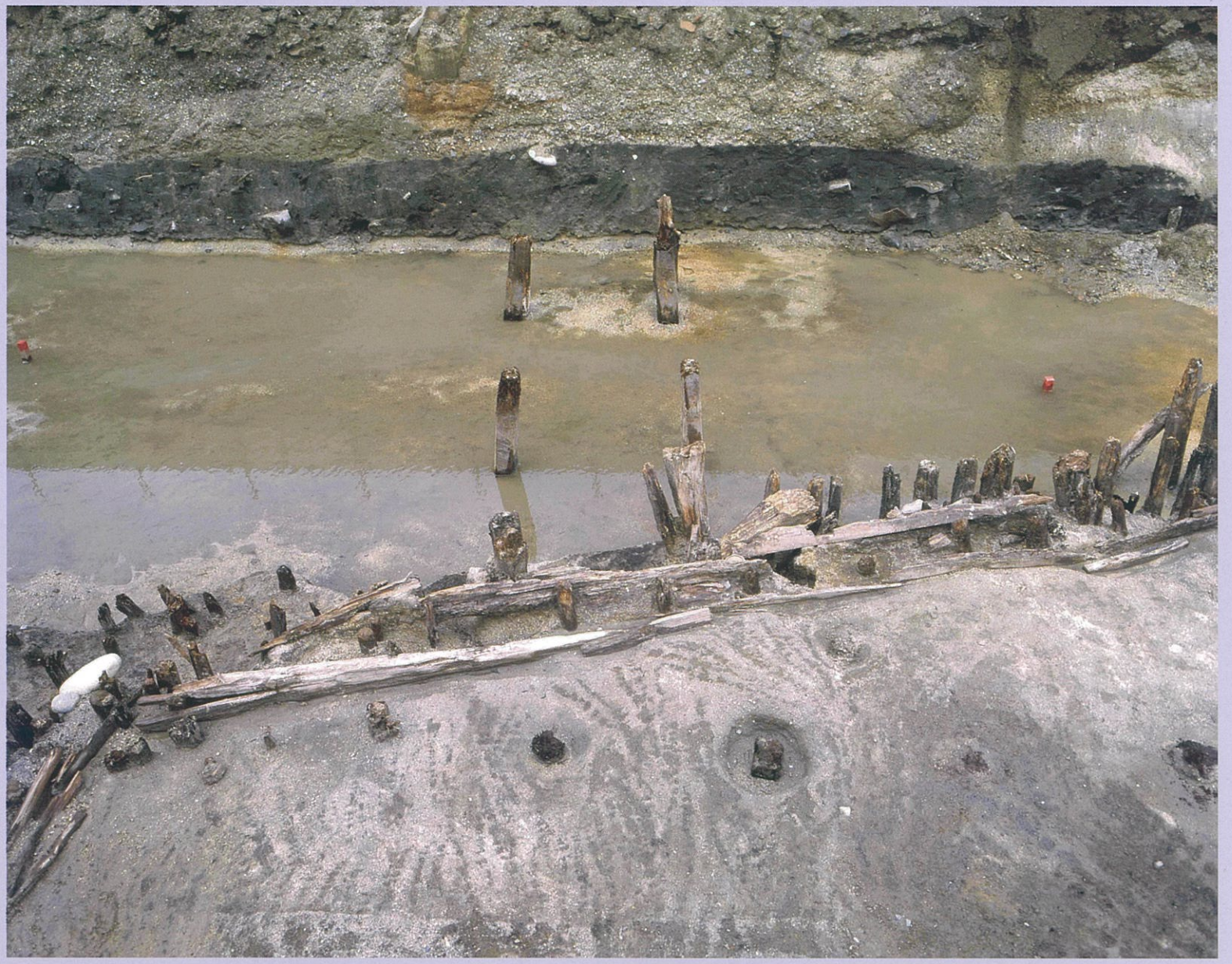
江戸時代の四日市代官所跡

（約４１０～１５０年前）

現在の市内中心部は、享保９（1724）年～享和元（1801）年の大和郡山藩（今の奈良県）領時代を除くと江戸時代を通じて天領（幕府領）でした。

四日市代官所は幕府領支配の拠点で、市内北町の中部西小学校の場所にありました。なお、代官所の建物は明治時代になると、三重県庁等として使われていましたが、明治９（1876）年にすべて焼失しました。

明治時代に描かれた代官所の絵
四日市市立博物館蔵



代官所の堀にかかっていた橋の橋脚（手前が代官所）

第 18 回　発掘展～夏休み！子どものための考古学～

◆会期　平成 27 年 7 月 29 日（水）～8 月 23 日（日）
◆場所　四日市市立図書館　２階展示コーナー
◆編集　四日市市教育委員会　社会教育課
◆発行　四日市市教育委員会　平成 27 年 7 月 29 日

入れ歯（レプリカ）
ツゲの木で作られた入れ歯です。大きさから女性用と推定されています。

茶碗
唐草模様の茶碗です。黒い筋は、漆をぬって火であぶることによって接着した痕で、焼きつぎと呼んでます。